

令和元年度第1回さぬき市男女共同参画推進協議会 会議要旨

- 1 日 時 令和元年5月27日（月）14：00～16：05
- 2 場 所 さぬき市役所 附属棟 多目的室
- 3 出席者 【委員】尾崎委員 柿木委員 亀井委員 小山委員 多田委員 筒井委員
南田委員 六車委員 村上委員 山中委員
【事務局】向井総務部長 酒井室長 三宅係長
- 4 傍聴者 なし
- 5 会議次第 1 開会
2 会長あいさつ
3 議事
（1）令和元年度事業概要について
（2）男女共同参画週間事業について
（3）男女共同参画推進活動事業について
（4）意識啓発につながる事業協議
（5）その他
4 閉会
- 6 配布資料 資料1 令和元年度男女共同参画推進事業計画表
資料2 令和元年度さぬき市男女共同参画週間事業実施計画書
（男女共同参画週間セミナー、パネル展）
資料3 2019年度さぬき市男女共同参画推進活動事業
「男女共同参画につながる市民企画事業」関係資料
資料4 「男女共同参画につながる啓発アイディア」関係資料
資料5 その他資料
別冊 第2次さぬき市総合計画中期基本計画
- 7 議事の経過及び発言要旨

発言者	意見概要
	＜ 開 会 ＞ (14:00)
事務局	本日は、御多忙の中、御出席いただきありがとうございます。 ただ今から令和元年度第1回さぬき市男女共同参画推進協議会を開会します。 はじめに、さぬき市男女共同参画推進協議会 村上会長がごあいさつを申し上げます。
会長	<会長あいさつ>
事務局	ありがとうございました。 つづいて、会議の公開についてです。本会議は、「附属機関等の委員の構成及び会議の公開に関する指針」に基づき、「原則公開」となっています。

	<p>本日は、協議会の傍聴要領に従い 13 時 30 分から受付しています。いまのところ傍聴の希望はありませんが、会議途中で傍聴希望があった場合には、随時許可することとします。</p> <p>それでは、議事に入ります。進行につきましては、さぬき市男女共同参画推進協議会規則に基づき、村上会長にお願いします。</p>
会長	<p>よろしくお願いします。なお、本日の会議についてですが、終了予定時間を 16 時としたいと思いますので、ご協力よろしくお願いします。</p>
事務局	<p>早速ですが、今年度の事業計画に関連する議事として、議事 1「令和元年度事業概要」、議事 2「男女共同参画週間事業」、議事 3「男女共同参画推進活動事業」について、事務局から一括して説明をお願いします。</p>
事務局	<p><資料 1、資料 2、資料 3 説明></p>
会長	<p>事務局からの説明が終わりました。今年度の事業内容全体を通してお気づきの点がありましたら、ご意見や質問をお願いします。</p>
委員	<p>「男女共同参画につながる市民企画事業」の採択内訳は計画どおりだったのか？</p>
事務局	<p>選考の結果、募集要項のとおり 15 万円 1 団体、10 万円 1 団体、5 万円 2 団体に決定した。</p>
委員	<p>所属団体で周知協力を行いたいので、「男女共同参画週間セミナー」リーフレットを提供してほしい。</p>
事務局	<p>委員あてに送付する。 現在、先行して公共施設でのリーフレット配布に取り組んでいるが、6 月上旬からは市ホームページでも開催周知を行うので、各委員にも啓発協力をお願いします。</p>
会長	<p>「男女共同参画週間セミナー」で講演する講師の経歴などを教えてください。</p>
事務局	<p>講師の筒井央二氏は、性的少数者 (LGBT) 当事者団体「プライド香川」の会員であり、講演実績こそ少ないものの、かつては団体の副代表を務めた経歴を持つなど、現在も熱心に活動している。 今回、講演を依頼する契機となったのは、さぬき市内で豊富な講演実績を持つ LGBT 当事者 木村アンリ氏からの「私 (木村) ばかりが熱心に活動することで、私以外に当事者がいないかのような誤解が市民に広がってはいけない」との問題提議がある。そこで、木村氏に適任者の選考をお願いした結果、推薦されたのが筒井氏である。 事務局としても、LGBT 当事者の多様性を市民に知ってもらうことで、特別な存在ではないことを積極的に周知したいと考えている。</p>
委員	<p>「男女共同参画につながる市民企画事業」の応募状況は。</p>

事務局	5団体から応募があったものの、選考前に1団体が辞退したため、残る4団体で選考を行った。
会長	年間スケジュールになりますので、これから変更する点も出てくるとは思いますが、基本方針や事業内容全体について異議はありませんか。
委員	<異議なし>
会長	ありがとうございます。事務局は、委員と情報を共有しながら取組を進めてください。 次の議事に移ります。議事4「意識啓発につながる事業協議について」、事務局から説明をお願いします。
事務局	<資料4 説明>
会長	昨年度第6回協議会の議論、5月に開催された男女共同参画推進市民サポーター会議での意見などを踏まえて、議論を進めたいと思います。 委員は多様な立場からこの場にお越しいただいていますので、ぜひ積極的なご意見をお願いします。
委員	これまで男女共同参画の取組は長年の積み重ねがあるものの、活動メンバーの同世代への啓発に留まっていること、とくに若い世代への啓発が課題だということが、よく理解できた。
委員	5月26日、徳島市で「W20ジャパンネットワーク徳島フォローアップイベント」に参加してきた。W20とは、G20（主要20カ国首脳会談）の公式パートナーの一つであり、経済発展のため女性の視点で経済政策を考え、G20に提言を行う組織である。この日は、労働・金融・デジタル・政府の4つをテーマに男女格差の解消を目指すことで、働き方改革や女性活躍促進を通じた「新しい地域経済発展のカタチ」を徳島から発信する、という3時間にも及ぶイベントだった。 このイベントに参加して一番驚いたのは、日曜午後からの開催にもかかわらず、性別や年齢、所属組織などを問わず110人が参加していたことである。なかでも、男性が35人も参加していたのが印象的だった。
委員	参加して気づいた点は。
委員	子育て中の母親が、どうやって参加しているのだろうと様子を伺うと、会場内に託児スペースが設けられているため、安心して参加できていることがわかった。 また、参加している大学生からは「地域で交流や話し合いをしたい思いはあるものの、交流できる場がない。かといって、自分たちで交流の場を作ろうとしても、ノウハウを教わることができるようなネットワーク（横のつながり）がない。」という意見が出されていた。 イベントに参加してみて、「決して若い世代が無気力ではないこと」「若者一人ひとりが思いを持っているものの、自分の考え方を理解してくれる人にしか吐露しない」など、本当に勉強になった。

	若い世代が考えていること、心の声を拾い上げることは本当に大変かもしれないが、一人ひとりとの距離感が近い地方部での地道な取組こそが、意外と近道なのかもと感じることができた。
委員	さぬき市のイベントでは、目的遂行のために参加動員を行うものがあるが、主体的な参加でなければ学習効果は望めない。 徳島のイベントは、どのようにして参加者を集めていたのか。
委員	クチコミやインターネットを經由した情報発信を受け取った参加者が主体的に参加していた。参加者は、個人単位で、グループでの参加者はほとんどいなかった。
委員	徳島のイベントの参加者たちは、何が「きっかけ」になって参加したのだろうか。参加者が「聞いてみたい」と思えるテーマだったからだろうか。
委員	主催団体のメンバーは、20歳代の大学生からシニア世代まで幅広い構成で、女性の経営者・リーダーの育成や情報発信の大切さを伝える活動をしているようだ。
委員	イベントに対して、行政による支援はあったのか。
委員	イベントの共催は徳島県で、経済団体などが後援していた。 主催団体は徳島県や県議会に対しても積極的に働きかけるなど、行政との協働を意識した主体的な活動であって、行政主導の取組ではないと感じた。
委員	主催メンバーの人数や性別は。
委員	15人程度で全員が女性だった。
委員	イベントの開催情報は、どうやって入手したのか。
委員	インターネットの「フェイスブック」で情報を見て、興味を持って参加した。 資料代(500円)や会場駐車場代など、参加者負担が求められるイベントだったが、「本当に参加したい人たちが、主体的に集まったイベント」だと感じた。
委員	ワークショップの内容は。
委員	テーブルごとに「男性の育児参加への課題」や「新しいグループづくりへの悩み」といったテーマが10程度設定され、参加者自身が関心のあるテーブルに座ってグループ討議が進行した。
委員	参加者の関心が高かったテーマは。
委員	「学校教育や家庭教育での悩み」や「企業内でのジェンダーの取組」に人気が集まる一方、「メディアリテラシー」のテーブルは参加者が少ないように見えた。
会長	参加されたイベントは、マララ・ユスフザイ氏の基調講演がメディアに取り上げられて有名になった「国際女性会議WAW! (World Assembly for Women)」の活動を、日本国内で持続させ続けることを目的とした取組なのですね。

	<p>徳島県は、教育機関が主催する女性活躍推進の取組に率先して県知事が参加するなど、男女共同参画推進の活動が熱心な土地柄です。こうした背景には、女性経営者の割合が高いことなどが影響しているかもしれません。</p>
委員	<p>国の機関のサテライトオフィス誘致を進めるなど、率先して情報発信を試みる努力を重ねているように見える。</p>
事務局	<p>徳島市では、平成7（1995）年に女性経営者が中心になって「阿波女あきんど塾」を立ち上げ、その後20年以上にわたって女性の社会進出を促進する環境づくりに継続して取組んでいる。</p> <p>これは地域の中で女性の意見を生かす好循環が生まれている証だと考えられるが、このような仕組みを現在のさぬき市で実現することはできるだろうか。</p> <p>実現できる、もしくは実現できない原因や背景について委員の意見を聞きたい。</p>
委員	<p>子育てや政治など、若い人たち自身に関連する社会課題には当然関心を持っているが、意見を発信したり、受信したりすることが全て自己責任の風潮になっているため、気軽に声を出せなくなっている恐れがある。また、声を出そうとしていた若い人たちの意見に耳を傾ける努力を疎かにしてきた大人たちにも責任があるのかもしれない。</p>
委員	<p>イベントに参加してみて、若い人たちに「ちゃんとバックアップするから、まずはチャレンジしてみなさい」と意見表明できなかった私たちに責任があるのかもしれないと自己反省したのは事実である。</p>
委員	<p>香川県では、企業や地域などの場面に関係なく、何か失敗したときに叱責される傾向が強すぎると感じる。その結果、よい考え方や高い能力を持っているにもかかわらず、チャレンジする意欲を失っている女性たち、男性たちが多くいると実感する。その人たちが共通して述べるのが、「前向きに受け止めてもらえる場所であれば発言するが、叱責されるような環境では発言したくない」ということである。</p> <p>よい考え方や高い能力を持つ人たちが、自由に意見を述べる場づくりが絶対に必要であり、こうした思いに共感できる理解者を増やす活動も同時に準備することが求められている。</p> <p>徳島での取組では、こうした場づくりや理解者たちの輪が広まった結果として、熱心な活動が持続しているのかもしれない。</p>
委員	<p>イベントの中では、学生の参加者たちに「社会に出れば、性別による差別的取扱いを受けることになる」という趣旨の声かけが行われていたことから、徳島でも固定的な性別役割分担意識や社会通念慣行は根深い問題なのだろう。</p> <p>一方、ワークショップの中では「間違いなく社会の意識は変わりつつある」との発言も行われていた。現在の日本は、「長時間労働がモノやカネで報われる、希望あふれる華やかな時代」ではなく、「人口や経済の規模が縮小・衰退している時代」である。そのような時代に暮らす若者たちに、華やかな時代を歩んだ大人たちの価値観を押し付けてもうまくいくはずがない。</p> <p>ワークショップでは、参加者から「男女共同参画の取組では、10年前には正しいとされていた意見が、現在では誤っているとされる事例がよくある。常に新しい知識を取り込むための意欲や努力が必要である」とか「意見の異なる人たちを拒絶するのではなく、互いの価値観を擦り合わせる対話、きめ細やかなコミュニケーションが大切だ」との意見があった。本当に大きな課題を与えられる機会だった。</p>

委員	<p>現在の社会は「自己肯定感」を高める流れは一定程度達成しつつあると感じる一方、「他者肯定感」を高める取組は道半ばだと感じる。</p> <p>例えば「清掃」を事例に考えると、その目的は「一定範囲を美化する」ことであり、その手段は複数存在するはずだ。しかし、世間では「それは私の思っていた手法とは違う」「あなたのやり方は間違っている」といった自分の意見を押し付ける議論が多く行われている。また、「企業」を事例に考えると、企業経営の目的は「経済活動を通じた利益の獲得」であるはずなのに、「女性だからこの仕事は任せられない」などと理由を付けて、経営効率に反した判断を下す社員や管理職が未だにいる。</p> <p>「他者を否定する一方で自分を肯定すること」は、自分を変える意識の欠如、つまり偏見に基づいたものであって、個人の人格形成や人間的成長を妨げかねない問題である。男女共同参画をはじめとした、人権に関する諸問題の根本的な解決を目指すためには、地域社会の中で「他者肯定感」「他者を相互に理解できる関係性」「一人の人間としてのあり方」を育む地道な努力しかないのではないかと。</p> <p>その際、行政に注意してもらいたいのが「目的と手段の取り違い」である。行政は、セミナーやパネル展を開催すれば市民意識が高まった（「手段」を実行すれば「目的」が達成される）と誤解しがちだが、そんなに単純な問題であれば、この会議など必要ないはずだ。さぬき市には、男女共同参画意識を市民に染み渡らせられるような要素の選定や趣向をこらしたメッセージ発信といった具体的取組を期待する。</p>
委員	<p>この問題の背景には、高度経済成長期に経済活動へ突き進み、次世代の育成を疎かにしてきた日本社会に問題があるのかもしれないし、人格形成ではなく学力を重視してきた教育制度に問題があるのかもしれない。私には問題の背景を断定できる知見はないが、間違いなく言えることは「他者肯定感」が低下しているという事実だ。</p>
会長	<p>教育制度の話が出ましたが、学校現場での道德教育の取組について教えてください。</p>
委員	<p>日本の子どもたちは、世界と比較して全般的に自尊感情が低いことが世界的な調査で明らかになっており、学校現場では児童生徒の自尊感情を高める教育、自分を肯定する気持ちを失いかけている子どもたちへの支援を続けている。こうした取組の成果もあつてか、さぬき市の児童生徒の自尊感情は、国や香川県の平均値よりも高い傾向にある。先ほどから委員同士で「他者肯定感」に関する議論が続いているが、模範解答など存在しないので、児童生徒と向き合いながら日々模索しているところだ。</p> <p>なお、道德教育は、令和2年度から小学校教育で、令和3年度から中学校教育で特別な教科として採用される予定となっている。</p>
委員	<p>教科になるということは、「道德」についても成績評価が行われるのか。</p>
委員	<p>教科である以上、評価を行うことになるが、従来のような数値化した評価ではなく、児童生徒一人ひとりの成長や伸び具合を評価することになっている。</p>
会長	<p>よくわかりました。他の委員から意見はありますか。</p>
委員	<p>二点発言したい。まず一点、「あらゆる暴力の根絶」について。</p> <p>地域社会には、性別や年齢の異なる多様な人たちが生活しており、高齢者もその一員である。そして、高齢者夫婦の間で問題となっているのが、「モラルハラスメント（モラハラ：精神的な苦痛を与えるDV）」である。高齢化が進むさぬき市にとって</p>

	<p>モラハラは身近な課題であり、年齢を重ねても夫婦が一緒にいて息苦しく感じず、互いに尊重し合える関係を構築できるよう啓発することも大切だと感じている。</p> <p>もう一点は、「行政や事業所における女性管理職」について。</p> <p>これまでは女性管理職の「人数」「割合」が注目されてきたが、これは当然取組むべきことに過ぎず、本来求められるべきは「女性管理職の能力を伸ばすこと」である。女性職員や女性社員が「ぜひ身につけたい」と感じている技能・スキルの習得を支援することが、ひいては女性管理職の増加につながっていくはずである</p> <p>「若い世代」や「学校教育」、「女性管理職」といったキーワードを聞き、「PTA」が思い浮かんだ。PTAでは、ほとんどの役員は女性にもかかわらず、会長は男性にお願いするといった組織運営の風習が引き継がれている。こうした誤った認識を放置することは、地域社会に悪影響を与えることにつながらないか。</p> <p>現在、市内には幼稚園から高等学校まで20程度のPTAが存在するが、こうした場をうまく活用すれば、正しい理解や認識の周知、若い世代との連携などに資すると感じるが、行政は「教育組織だから」「高等学校だから」といって真剣に向き合っていない。ぜひ活用を検討してもらいたい。</p> <p>もう一点は、「市民グループやボランティア団体のあり方」である。すでに議論のあったとおり、若い世代とシニア世代の両者が「世代間のギャップや対立を解決するのは面倒だから、このまま放っておこう」と認識していることが一番の問題だ。また、「市民合唱祭に中学生の合唱グループを招待すれば、生徒の保護者が集まることで観客が増えて賑わいづくりにつながるのでは」と提案したが、役員会で出てくるのは「学校との連絡調整が大変」「部活動との調整ができない」といった反対意見ばかりで、前向きな取組の難しさを実感した。</p> <p>地域を活性化するためには、行政も地域も本気で取組む必要がある。例えば、行政が市民の中に入っていく地域の活性化に専門的に取組む部署を設置してはどうか。</p>
委員	<p>さぬき市には、子どもから大人までが参加する劇団「プチミュージカル」がある。こういった場も活用できるかもしれない。</p>
委員	<p>若い世代が活躍する場として「さぬき舞人」もある。本論とは異なるかもしれないが、若い世代への支援が結果的に地域を活性化させ、男女共同参画のつながりを生む場づくりになるかもしれない。</p>
委員	<p>これまでの行政は、「多様な住民意見の反映」を名目に、広くて浅い玉虫色の支援を続けてきたが、これまでのような陳情型予算措置では財政破たんしてしまう。</p> <p>人口減少社会を迎えるなかで限られた財源を有効活用するためには、「課題Aを解決するために事業Bを実施します。そして3年後、事業Bに充てていた財源を新事業Cに投資します」といった行政自身による主体的な判断が必要となるだろう。こうした取組を行政が実践するためには、市民に対して「損して得とれ方式」の行政運営を理解し、納得してもらう必要がある。</p> <p>「声の大きな人の意見がまかり通るような社会」とは、男女共同参画社会の対極にある考え方といえる。父親として、母親として、地域の先輩として、誇れる郷土さぬき市であるためには、繰り返しになるが「地域のなかで他者を相互に理解できる関係性」が大切だと感じる。</p> <p>男女共同参画の課題は、非常に間口が広く、また根深い問題ばかりで根本的解決には長期間にわたる忍耐が求められるだろうが、いつまでも避けてははいられない。覚悟を決めてやるしかない。</p>

<p>会長</p>	<p>本日の会議は、さぬき市の課題を委員の皆さんが自分の言葉で語る本当に有意義な時間であり、この議論を今回限りで終結させるのは惜しく感じます。 この議論を今後につなげるためには、委員の皆さんのフィールドに分け入って、議論を実践につなげることが必要なのではないのでしょうか。</p>
<p>委員</p>	<p>最近、アメリカではワクチン接種の是非を問う問題が起きているが、賛成・反対が入り混じった議論が繰り広げられている。中にはフェイクニュースが含まれていて、子どもや保護者たちが混乱に巻き込まれている。適切な情報を選択して入手することは本当に難しいと感じる。 「男女共同参画」という言葉にしても、言葉の定義や込められたメッセージが正しく伝わらなければ意味がない。こういった意味では、シンポジウムやパネルディスカッションにも意味はある。すべては使い方次第だ。</p>
<p>委員</p>	<p>行政は「広報発表すれば全ての市民への説明責任を果たした」と主張するが、広報紙やホームページによる一方向の情報発信は限界を迎えつつある。これからの時代に必要なのは、住民との双方向コミュニケーションだろう。 先進的な自治体の中には、住民からの電話問い合わせ対応に加えて、インターネットを活用してA I（人工知能）が住民からの問い合わせに瞬時に回答する「チャットボット」の仕組みを導入するところも出てきた。この仕組みであれば、若い世代が抱えている不満に夜間や休日を問わず対応することができるほか、質問に自動回答するため、職員の電話対応時間などの事務負担を削減することにもつながる。 先進的な取組には反対が多いことも理解できるが、若い世代の賛同が得られて、それが移住や定住につながり、ひいては人口や税収が増加するのであれば、早急に取組むべき課題であると考えます。 行政は、全ての市民へ広報する必要があるため大変だと思うが、情報を伝えるべき相手に見合った啓発活動に取組んでほしい。</p>
<p>委員</p>	<p>シニア世代や障害のある人たちの中には、紙媒体の広報が良いとの意見がある一方、視覚障害のある人にとっては、文章の読み上げ機能があるインターネットや音声による広報を求めている。行政の広報啓発は、全ての市民を網羅せねばならず、本当に大変だと感じる。</p>
<p>委員</p>	<p>市民の中には「行政の広報啓発が私にまで届いておらず、不十分だと感じる」と不満を漏らす方もいるだろうが、こうした声に完璧に対応しようとするれば市民一人ひとりに面会や電話で直接メッセージを伝えるしかなくなる。こうなってしまうと、本来目指していたはずの「効率的な行政運営」とはかけ離れたものになってしまう。 これからの行政運営に求められるのは、「市民自身が行政のあり方を考える」ことだ。広報紙を例にすると、全世帯に配布していた広報の印刷枚数を希望する世帯だけに絞り、そこで生まれた余った経費を、若者や障害者に向けたインターネットによる情報発信に振り分ける、といった提案も考えられる。 自治体が、地域課題の解決策として「小手先の対応」や「結論ありきの議論」に終始しているのは、少しでも市民の不満を減らそうと努力した結果ではあるが、これでは「地域をよくする」ことにはつながらない。これからのさぬき市に求められるのは、新しい発想・提案を生み出す市民を育むことであり、こうした発想・提案を自由に発言し、また受け止められるような環境づくりである。 行政と市民の接点を増やすような基盤づくりや取組が整備されると、行政の運営決断</p>

	<p>に対して市民たちは共感を覚えるだろうし、結果的に不満を抱く市民たちも減っていくだろう。そのためには、当然さぬき市自体が発想を変えていくことも求められる。</p>
委員	<p>「シニア世代」といえども、健康や情報取得、地域とのつながりなど各場面で大きな格差がある。「市民の皆さんに伝えます」という広報活動では、結局誰にも伝わっていない場合が多い。これからの行政には、どういった人たちを想定した男女共同参画の情報を発信するのか、伝える相手を明確に定めた取組が大切だと感じる。</p>
会長	<p>熱心に議論いただき、本当にありがとうございました。 かなり多岐にわたる議論となりましたので、まずは事務局に議事録の作成・整理・取り得る施策の検討をお願いしたいと思います。</p>
事務局	<p>議事録が作成でき次第、委員に送付する。 ただし、さぬき市の今後5年にわたる男女共同参画施策に関する重要な議論なので、事務局の意見は伝えるが、方針を誘導するような具体的な施策の提示は避けたい。 事務局からは、次回会議においても同じテーマでの議論の継続を提案する。</p>
委員	<p>この会議には、男女共同参画活動に対する意識の高い人たちが参加しているため、「さらに男女共同参画意識を高みへ導くためには」という議論になりがちだ。しかし、この会議が目指す方向性は、それで本当に正しいのだろうか。 男女共同参画意識が一定程度まで高まっている市民は、自発的な活動へ移行しているはずであり、こうした市民の意識を高めるために「市民サポーター制度」や「市民企画事業」が準備されていることを評価したい。 一方、こうした活動に従事する人たちだけが啓発活動に取り組んでも、その声が届く範囲は、どうしても固定的だったり限定的だったりする。この点については、個人に根差した活動なのだから当たり前、仕方のないところもあるが、だからといって率先して活動するメンバー、そして行政自身が同じ過ちを繰り返しては「自己満足のために活動している」と批判されても反論できない。やはり新たな取組が必要である。 そこで、次回への提案として「男女共同参画に興味のない市民、知識はあっても実践できていない市民に対する啓発方法のあり方」を検討してはどうか。 言い換えれば、「従来の啓発活動が効果を発揮しなかった市民の意識啓発」である。</p>
事務局	<p>議論の切り口として、参考にさせていただく。</p>
会長	<p>熱心な議論ありがとうございました。 次の議事に移ります。議事5「その他」について、事務局から説明をお願いします。</p>
事務局	<p><資料5 説明></p>
会長	<p>今回の議論を、この場限りのものにするのは大変惜しく思います。事業計画では、次回会議は9月となっていますが、会議を追加開催して議論することは可能ですか。</p>
事務局	<p>今年度は最大4回まで開催できる。</p>

会長	これだけ熱心に議論が展開された以上、「鉄は熱いうちに打つべきだ」と感じます。委員の皆さんは、開催に同意いただけますか。
委員	<異議なし>
会長	それでは、いまから開催日程を協議します。
委員	<日程協議>
会長	それでは、7月22日（月）午後2時から第2回会議を開催することに決定します。なお、日時や会場など詳細については、事務局からの案内を確認してください。
総務部長	<総務部長あいさつ>
会長	本日、出席できなかった委員もいますが、本当に実りある議論、意見交換の時間となりました。次回の会議では、さらに議論を深められたらと考えています。令和元年度第1回さぬき市男女共同参画推進協議会を閉会します。お疲れ様でした。
	< 閉 会 > (16:05)